

《研究サーベイ》

# アジアの研究者は新型コロナウィルス感染症パンデミックの 何をどう研究したか： アジア研究学会第8回 AAS in Asia に参加して

日 高 勝 之\*

## How Asian Researchers Framed, Problematized, and Addressed the COVID-19 Pandemic: Insights from the 8th Association for Asian Studies Conference in Asia

Katsuyuki HIDAKA

The COVID-19 pandemic that began in 2020 forced academic conferences to be either canceled or shifted online. However, with the normalization of social activities in many countries by 2023, numerous academic conferences had resumed in-person events. Among these was the Association for Asian Studies (AAS), the world's largest academic association dedicated to studying Asia. Since 2014, the AAS has organized its annual regional conference under the title AAS in Asia. In June 2023, the conference was held at Kyungpook National University in Daegu, South Korea for the first time in three years. An exceptional number of research panels and presentations at this conference focused on the pandemic's impact on Asia. This study examines how the researchers at this conference problematized the pandemic in Asian countries and identifies the various aspects of the pandemic they highlighted. The key presentations are categorized into three main themes: (1) state and governance; (2) citizens and migrants; and (3) social media, diaries, and poetry. Moreover, this study provides an overview of the primary characteristics and outcomes of the conference.

キーワード：コロナ禍、パンデミック、アジア、統治・政策、ソーシャル・メディア

Keywords: COVID-19, pandemic, Asia, governance, social media

---

\* 立命館大学産業社会学部教授

khidaka@ss.ritsumei.ac.jp

## I. はじめに

2019年末に始まり、2020年から世界的に広がった新型コロナウィルス感染症の流行（COVID-19 pandemic）は、世界で7億人を超える感染者、および700万人を超える死者を出すなど、そのグローバルな被害と影響は極めて大きい。また、人々の行動制限、ロックダウン、ソーシャル・ディスタンスの導入、およびそれによる経済活動への影響や失業などによる格差の拡大、在宅勤務やオンライン教育などの職場や学校への影響、さらにはメンタルヘルスの問題など、コロナ禍の影響の大きさと広がりは巨大なものであった。コロナ禍と無縁な国と地域は世界に一つとしてないほどのグローバル現象であることも言うまでもない。

世界各地の学会などの学術交流活動も、2020年春からは対面での学会やワークショップは中止を余儀なくされ、非開催もしくはオンラインによる開催が続いた。2023年に多くの国々で社会活動が正常化したことに伴い、数年ぶりに対面での開催に踏み切った学会も多い。

Association for Asian Studies (AAS)（以下、アジア研究学会）もそうであった。アジア研究学会は、第二次世界大戦中の1941年にアメリカで設立され、アジアに関する様々な領域や問題を研究する学会として戦後発展し、現在世界の会員数は6千人を超えており、アジアに関する研究を扱う学会としては世界最大である。毎年、世界大会が開かれるのみならず、2014年からはAAS in Asiaの名称でアジア地域での年次大会も開催されてきた。しかしながら、2019年、タイ・バンコクのタマサート大学での大会を最後に、コロナ禍のため、2020年はオンライン開催、2021年と2022年は中止に追い込まれた。ところが2023年6月24～27日に3年ぶり、対面形式としては4年ぶりのAAS in Asiaが韓国第3の都市大邱の慶北대학교 (Kyungpook National University)で開催された。コロナ禍が一段落して開催されたこの第8回目となるAAS in Asiaは、40か国以上1200人を超える参加者と270のパネルで構成され、過去最大の参加者数および規模となった。

注目すべきは、コロナのパンデミックに関する研究パネル、研究発表数の多さであった。数年間、学会発表の機会が奪われていたアジア研究者たちが、自分たちが直面したコロナのパンデミックそのものを対象にした研究の国際的な場での発表の機会を求めてこぞって応募したということであろう。大会テーマがAsia in Motion: Memory, Preservation and Documentationであったことも各国の研究者たちの背中を押したに違いない。

筆者は、メディアと文化をめぐる国際交流に関する研究パネルの座長および司会を依頼されてこの大会に参加したのであるが、開催期間中にコロナのパンデミックに関係するパネルや研究発表を出来る限り聴講してまわった。なぜならば、筆者自身、東日本大震災、福島原発事故後のメディア、文化、政治に関する研究をこれまで多角的に推進してきた経緯から（日高, 2016; 2018; 2021; Hidaka, 2022; 2023ほか）、巨大カタストロフィ時の政治、文化、メディアのありよう強い関心があり、各国の研究者がパンデミックの何をどう議論するのか、強い関心があるからである。そのため、この学会以後も様々な国際学会、国際ワークショップに参加し続けたのだが、この韓国・大邱でのAAS in Asiaほどコロナのパンデミックについての質量共に充実した研究発表の場に出会うこととはなかった。この大会の充実ぶりは、未曾有のパンデミック収束直後という特別なタイミングゆえであったことに後になって気づかされた次第である。本稿を著したのは、この韓国・大邱のAAS in Asiaは、アジアの研究者が、アジアにおけるコロナのパンデミックをどのように経験し、何を問題化して問うたかの歴史的記録に値すると考えた次第である。

以下、(1) 国家・政府、(2) 市民・移民、(3) ソーシャル・メディア、日記、詩の3つに大別して、主だった研究発表を簡潔に紹介する<sup>1</sup>。そして最後に、この大会全体の主な特徴や成果について概観しつつ整理したい。

## II. 国家・政府

Francesca Frassineti (University of Bologna, Italy) は、統治の正当性を強化することを目的とした国家当局による政治メッセージについて、災害マネジメントの学術的議論が十分に検討されてこなかったことを問題化する。Frassineti は、コロナのパンデミックの状況下で統治の正当性を回復するために、「モラルパフォーマンス」を有効なツールとして国家が利用したことを、中国と韓国を事例に論じた。興味深いのは、中国が2003年のSARS（重症急性呼吸器症候群）、韓国が2014年のセウォル号沈没事故というような、21世紀のカタストロフィ時の政府の対応を近年の失敗・反省事例として一種の負の文化シンボルとして利用し、それらと比較参照しつつコロナの強い感染対策は国家の統治の正当性があるとする「モラルパフォーマンス」の物語の構築を行ったことを解き明かしたことである。

Xuanxuan Tan (Aarhus University, Denmark) は、中国における医療用防護服のイメージの変遷過程を微細に検証している。パンデミックの初期に開発された新型の医療用防護服は、未曾有の社会的困難に立ち向かう最前線の医療従事者の勤勉さを象徴するイメージを社会的に獲得した。しかしながら、その後、医療プロフェッショナルでない人物が医療用防護服を身に着けるなどの不法行為や、医療従事者の権限乱用などの不正行為が明るみになることでポジティブなイメージは解体され、防護服は「暴力的なテクノロジー」の象徴へと変貌し、結果的に中国のゼロ感染政策に影を落とすことになったと述べた。ここでは、防護服の物質性、肉体性、象徴性、専門性などが複雑に絡み合って公的イメージが乱高下したことを解き明かすることで、パンデミック状況下の国家の公的イメージのありようを、ある角度から可視化することに成功している。

Suan Ee Ong (Research For Impact, Singapore) は、マレーシア、フィリピン、シンガポール、ベトナムの4つの東南アジア諸国政府の対応を実証的に比較した。リーダーシップ、ガバナンス、リスクコミュニケーション、保健システム、経済支援、国際援助とグローバルヘルス外交、監視・モニタリング・情報共有のためのデジタル技術の使用などの幅広い観点からの検証が目を引いた。Ong は、多角的な検証を行った理由として、コロナのパンデミックのような巨大カタストロフィに対する政府対応を单一の物差しで測ることの危険性を挙げ、その上で、これら4つの国々の事情の検証結果はじつに多様だとして、単純な結論を避けるべきで、今後慎重に見極めていく必要があることを強調していた。その上で、(日本も支援したが) マレーシアがパレスチナにコロナ・ワクチンを支援するなど、パンデミックのタイミングで、グローバルヘルスの観点から各国はそれぞれ独自の外交戦略を行う動きが目立ったとの報告は印象に残った。

---

<sup>1</sup> 学会発表では、しばしば発表内容やデータの使用を発表者自身が参加オーディエンスに制限・禁止することがあるが、本稿ではそうした内容の発表は含めていない。

### III. 市民・移民

Mark R. Thompson (City University of Hong Kong) と Diego Fossati (City University of Hong Kong) は、東南アジア主要 5 か国（インドネシア、マレーシア、シンガポール、フィリピン、タイ）について、政府と市民の両方への大規模な調査を実施した。各国政府については民主的責任、経済管理、健康新政策の 3 つの指標から独自の調査を行っている。いずれの政府のリーダーも強い意思決定を行う、頼れるリーダーであると自分を市民に印象付けることでパンデミックを政治的に利用するポピュリスト政治を行ったが、特にインドネシアとフィリピンのポピュリズム政治は顕著だったとした。一方で、シンガポールはポピュリスト的対応が最も目立たなかつたが、死者数は少なく GDP 経済成長も決して悪くはなかった。1,200 人を対象にした市民調査では、いずれの国でも、経済の再分配よりもヘルスケアについての政府の役割を市民らは支持したことを明らかにした。そのため重要なことは、パンデミックは福祉国家のあり方の従来の認識を変えさせるほどの画期的なイベントであり、私権制限などの政府の介入をいずれの国の市民も一定程度支持したことを見明らかにしている点である。とはいえ、マスク着用の賛否は国ごとに差異があり、このことは国ごとの統治の正当性、および慣習・文化には、少なからず差異があることを示していた。

Sudarat Musikawong (Mahidol University, Thailand) は、タイへの移民に関する問題を議論した。パンデミックが生じた時点で、タイには近隣のミャンマー、ラオス、ベトナム、カンボジアなどから約 400 万人の移民労働者がいた。パンデミックは、これら移民労働者の立場を経済面および健康面の両方で非常に不安定な状態にさせたことを Musikawong は多角的に論じた。興味深かったのは、そうした状況下で移民支援の NGO と連携することで、移民労働者の中では、ソーシャル・メディアを駆使して、自分たちの過酷な状況をリポーターとして発信することが盛んになり、「移民ジャーナリズム」とでも呼ぶべきものが生まれたことである。

### IV. ソーシャル・メディア、日記、詩

#### 1. ソーシャル・メディア

Niken Ernungtyas (Universitas Indonesia) は、インドネシアでは、ソーシャル・メディア、特に Twitter (※現 X) が健康情報の伝達において重要な役割を果たしたことを検証した。Ernungtyas は、インドネシアの高等教育進学率は高くなく、都市と地方の間の教育格差も大きいとし、パンデミックが起きた時、国民の健康情報についてのリテラシーは概して低いという問題があったと指摘した。その中で、Twitter の情報、とりわけ医師、看護師、助産師などの医療プロフェッショナルが発する情報は極めて有用で、寸時に膨大な数のフォロワーを集め、これらの医療プロフェッショナルは、健康インフルエンサー (health influencer)、さらには「ミニ・セレブ (microcelebrity)」になった。注目すべきことに、多くの Twitter 上の医療プロフェッショナルが炎上などを恐れて、名前や所属を明かさず匿名で情報を発信したものの、インドネシアでは世間で広まった誤った情報、偽情報を正す役割も担った。さらに、彼らのフォロワー数が増加するにつれ、公衆衛生政策に関する世論にまで影響を与えたと Ernungtyas は実証的に論じた。

## 2. 日記

さて、今回のAAS in Asiaで興味深かったのは、パンデミック状況下の日記の創作活動に注目した研究発表が少なからずあったことである。日記がその時代や社会の貴重な記録として歴史に残ることは少なくない。日本では、古くは『更級日記』『紫式部日記』から20世紀の『にあんちゃん』『二十歳の原点』まで無数にあり、海外でも『アンネの日記』『ゲバラ日記』などが思い出されよう。この後者の2つの日記は、20世紀のカタストロフィの記録・証言として重要性がある。したがって、各国の日記が今回の21世紀の世界的なパンデミックの政治社会状況の貴重な記録として後世に残る可能性は十分にあるだろう。ここでは日記について扱った研究発表のうち3つをみておきたい。

まず、Weihang Wang (Chinese University of Hong Kong)は、冒頭でニーチェによる「忘却は記憶と同じくらい過去と未来を形作る重要な力である」との言葉を引用し、なぜ中国におけるパンデミックの記憶でなく忘却に注目する必要があるかとの印象的な提起を行った。Wangは、中国人々は1966年の流行性髄膜炎、2003年のSARSの集団発生などで重要な忘却のプロセスを経験したとして問題化し、今回のコロナのパンデミックでは、果たしていかなる忘却を経験するのか、ソーシャル・メディアに投稿された個人の日記から検証を試みた。Wangが特に注目するのは、中国・武漢に住む作家Fang Fangが、武漢が封鎖された直後の2020年1月25日からソーシャル・メディアに投稿し続けたオンライン日記である。Fangは連日、ロックダウン下の武漢での生活状況を投稿するがいつも翌日には中国政府当局の検閲で削除されてしまう。Fangのソーシャル・メディア(微博/Weibo)のフォロワーは380万人もいたのだが、投稿から1か月後に彼女のアカウントは閉鎖されてしまった。しかしながら、Fangの日記は英訳され、*Wuhan Diary: Dispatches from a Quarantined City*として、2020年6月にHarper Collins社から発行された<sup>2</sup>。ここには、投稿してすぐに削除されたFangの言葉が記録されているわけだが、彼女の言葉と中国当局の公的な言葉の落差に注目することで、何が公的に忘却されたかを窺い知ることが出来る。Wangは、Paul Connertonの言葉を引き合いに、民衆同士の絆を深めるための忘却は成功するが、その一方で民衆が忘却を強要される試みは必ず失敗に終わると述べた。しかしながら同時にWangは、2003年のSARSの内実や後遺症は忘却されてしまったとして、果たして中国ではコロナのパンデミックがどのように、また、どの程度、忘却されていくのかは、やはり検閲の問題も重なるため、簡単には見通せない今後のオープン・エッションだと最後に述べた。

Howard Choy (Hong Kong Baptist University)は、大疫病の日常を記録するジャンルとしての日記に注目するのは、日記には情動に頼りつつ過去の記憶と未来への期待を融合させる力があると考えるからだと述べた。日記は、パンデミックのような存在論的脅威や不安に人々が取り囲まれる時に、私的で秘密めいた空間を維持する方法、また一種の癒しや鎮痛剤として有効であり、そこからはじつに豊かなものを読み取ることが出来ると考えるのである。Choyの研究が興味深いのは、アメリカ在住の3人の中国系アメリカ人女性の日記に焦点をあてていることである(Zhang Lanの*New Yorkers in the Epidemic*、Dou Wanruの*Notes on New York's Epidemic*、Wang Ruochongの*New York Epidemic Diary*)。パンデミックという巨大カタストロフィに見舞われた時、中国系

<sup>2</sup> Fang Fangの*Wuhan Diary: Dispatches from a Quarantined City*は、邦訳も方方『武漢日記：封鎖下60日の魂の記録』(翻訳：飯塚容・渡辺新一)として河出書房新社から2020年9月に出版されている。同書では、「著者は、本書の印税を武漢の医療従事者およびその家族に寄付することを表明しています」と記されている。

アメリカ人女性という立ち位置の人々が、アメリカの地でどのようにナショナリティ、エスニシティ、ジェンダーなどのアイデンティティを交渉することになるのかを日記のナラティブから読み解こうとするのである。この研究は、3人の日記のスタイルでは、重みと軽み、風刺がミックスされると共に、母性愛、孤独、本物らしさ、リアル、反グローバル化などが顕著にみられると指摘した。

一方で、Shelley Chan (Wittenberg University, the USA) は、パンデミックの真っ只中に上海で暮らす中国人ではなく、上海の在留外国人たちが記したオンライン日記を検証した。上海には1万以上の国際的な企業が拠点を置き、多数の外国人が暮らしている。コロナウィルスの感染流行防止のためのロックダウンが行われたことは、彼らにとっては、突然にして異国の都市に閉じ込められたことを意味する。興味深いのは、Chan がこれらの日記に、外国人の視線からみた中国ロックダウンの現実の記録的価値もさることながら、それだけに回収されないものを見出していることである。Chanによれば、それらの日記には一種の「シュールな (surreal)」語り口とでもいうべきものがあり、それはおそらく、彼らが日記を書くという行為を通して、異国の地で恐怖と不安を洗い流すためのカタルシスを得ようとする無意識の立ち振る舞いだからではないかという。

### 3. 詩

Yang Xiang (Hong Kong Baptist University) は、パンデミックの中の詩人の創作活動に注目し、台湾の詩人 Chen Ko-Hua の *Singing with a Mask*、香港の詩人 Ho Fuk Yan の *Love in the Time of Coronavirus* の2つの詩集について考察した。Xiang は、この台湾と香港の2人の詩人の詩について、それぞれがパンデミックによって、自らの住む場所、すなわち台湾と香港が「孤立した島」に変貌させられ、地政学、都市景観、日常生活の観点から詩の創作に向かわしめたことから生まれたと論じた。Xiang は、2人の詩人の詩には共通してアレゴリーがあるとし、ショーペンハウエルを引き合いに、アレゴリーには表面にはみえない含意があるとし、詩の表層と深層の二層に注目する必要があると述べた。そうして眺めるならば、彼ら2人の表現の含意は相当に異なるという。ゲイであることを台湾の詩人として初めて公言したことで知られる Chen は、COVID-19 と HIV を結びつけることで、ゲイの視点から、差別、無関心などと密接に関わる疫病のアイデンティティ政治を詩の中で控えめに表現した。一方で Ho は、表層的にはパンデミック状況の社会政治批判を言葉にしながら、その奥には香港に対する強い執着と愛情が込められているとした。Ho の詩では、ウイルスは香港の隠喩 (metonymy) であり、香港人はウイルスの犠牲者であるが、同時に、香港も香港の人々もウイルスと同じような状況を共有している。マスクはパラドキシカルな記号として表現される。マスクの強要は一種の暴力でもあると共に、一方で携帯可能なシェルターのようなものにもなりうる。マスクを通して、Ho の詩は統制と防御の境界とは何かを問いかけたという。

### V. まとめ

韓国・大邱で開催されたアジア研究学会第8回 AAS in Asia には、他にも多数のパンデミック関連の研究発表、パネルがあり、扱う研究対象や切り口、問題意識はじつに多種多様であった。その上でこの大会で気づいた点を、以下、簡潔に整理しておきたい。

まず第1に、各会場ではじつに活発な質疑応答、やりとりがみられ、強い熱気が感じられたこと

である。むろんのこと、久しぶりの対面開催という事情もあったと思われるが、注目すべきは、アジア各国の研究者が自分の問題意識から他国のパンデミックの状況を少しでも学び取ろうとする熱気が至る所で感じられたことである。パンデミックの研究発表の多さもさることながら、パンデミックに関する情報共有への渴望がまれにみる活気を生み出したように思われた。

第2に、中国系の研究者の発表や発言が目立ったことである。中国系の研究者がアジアの中で突出して数が多いことと、大会開催地が韓国であったことを鑑みれば、それは当然と言えば当然かもしれない。しかしながら、大会の発表内容からは、それだけでは説明できないものを感じさせられた。端的に言うならば、突然のパンデミックという事態、しかも中国が新型コロナウィルスの起源であるとしばしば指摘されることもあるこのグローバルなカタストロフィに直面して、中国の国家と民主主義に関わる問題がどういう形で現れるかへの強い関心、およびそれを国際学会の舞台で共有することへの並々ならぬ意欲とでも言うべきものが中国系研究者の間で随所に窺われたのである。一方で、この大会には1,200人の参加者がいたのだが、4日間の大会期間中に日本人研究者とそれ違うことはほとんどなかった。

第3に、近現代の比較歴史的視点が多くの研究発表から感じられたことである。本稿では、中国における1966年の流行性髄膜炎、2003年のSARSの集団発生、韓国の2014年のセウォル号沈没事故が引き合いに出される事例を紹介したが、他にもアジア各国の近現代のカタストロフィックな出来事が参考される研究は少なくなかった。コロナのパンデミックそのものは個別具体的なものであるにせよ、歴史的なコンテキストからパンデミックにアプローチする視点は日本でももっとあってもよいのではないかと思わせた。

第4に、医療、政治、経済のみならず、ソーシャル・メディア、詩、日記はじめ文化ジャンルの研究発表が目立ったことである。カタストロフィと文学に関する研究は、日本でも東日本大震災、福島原発事故後などに行われたが、その多くは小説を研究対象としており（代表的なものに川村, 2013; 木村, 2013; 2018; 限界研編, 2017ほか）、詩や日記を対象としたものは少ない。また、オンライン日記を扱ったものは管見の限りではないようだ<sup>3</sup>。しかしながら、オンライン日記には、プライベートな手記の性格（私秘性）と社会に発信する性格（公共性）の両義的性格がある。とりわけ、後者においては、不特定多数の目に触れることを想定する点で、巨大カタストロフィが起きた際には、社会批評がより強く意識されることになるだろう。それを鑑みれば、コロナのパンデミック状況下の日本語による詩、（オンライン）日記なども今後、検討に値すると思われる。

以上述べてきたが、一方で、コロナのパンデミックの経験は急速に忘れられていることを最後に触れておく必要がある。同じく巨大カタストロフィではあっても地震、津波、洪水、台風などの災害はその後の復興などの継続的なアジェンダがあるが、パンデミックは社会が正常に戻ると、アジェンダから宿命的に遠のいていく。冒頭でも述べたが、筆者はその後も大小様々な国際学会、国際ワークショップに参加し続けているものの、コロナに関するテーマや発表は顕著に少なくなっているように感じられる。コロナそのものではなく、むしろポスト・コロナが議題化されることがある。また、2022年からのロシアによるウクライナ侵攻、2023年からのイスラエルとパレスチナの紛争など、グローバルにみても新たな重要議題が生まれている。コロナのパンデミックはますます議題

---

<sup>3</sup> もっともオンライン上での日記とブログなどの境界線は曖昧である。筆者は、福島原発事故後の自主避難者のブログについての検証を行ったことがある（日高, 2018）。

から遠のいていくかもしれない。その意味からも、2023年のAAS in Asiaは、アジアの研究者がパンデミックの何にどうアプローチし、問題化したかが可視化、共有できる貴重な場であったと言えるだろう<sup>4</sup>。

## 参考文献

- 川村湊 (2013)『震災・原発文学論』インパクト出版会.
- 木村朗子 (2013)『震災後文学論：あたらしい日本文学のために』青土社.
- (2018)『その後の震災後文学論』青土社.
- 限界研編 (2017)『東日本大震災後文学論』南雲堂.
- 日高勝之 (2016)「『メタ政治的正義』としての原発・エネルギー議題：フクシマ後の「原発議題」報道の検証必要性」『立命館産業社会論集』第52巻3号, 35-53頁.
- (2018)「カタストロフィとソーシャル・メディア：福島原発事故自主避難者ブログの研究」『立命館人文科学研究所紀要』第115号, 249-276頁.
- (2021)『「反原発」のメディア・言説史：3.11以後の変容』岩波書店.
- Hidaka, Katsuyuki. 2022. *Japanese Media and the Intelligentsia after Fukushima: Disaster Culture*. London: Routledge.
- . 2023. Japanese Politics and Nuclear Energy in the Ten Years since Fukushima: A Meta-Political Justice Perspective. In N. Novikova, Julia Gerster, and M. G. Hartwig (eds.), *Japan's Triple Disaster: Pursuing Justice after the Great East Japan Earthquake, Tsunami, and Fukushima Nuclear Accident*. London: Routledge, 73–95.

<sup>4</sup> 第8回AAS in Asiaのすべてのパネル、研究発表のアブストラクトは、以下の大会ホームページで閲覧することができる。<http://knuaas.co.kr/>